一般演題　(18)

血液透析患者の皮膚掻痒症の実態と接着因子との関連

渡辺内科クリニック　○柿沼敦子　渡辺幸康　斉藤浩次　山本登

【はじめに】血液透析患者の皮膚掻痒症の発症機序や病態に関しては未だ不明な点が多いのが現状である。近年、アレルギーの研究は進み、マスト細胞からはケモアトラクタントが放出され、さらに、ケモカイン・サイトカインが大量に産生されることによって、血管内皮細胞に VCAM-1, ICAM-1 などの細胞間接着因子が発現されるようになり、そこに流血中の好酸球や好塩基球,リンパ球が結合して末梢組織に浸潤し、組織ダメージを与えることも一因となることが、アレルギー研究の中で病態研究が進みつつある。今回われわれは、血液透析患者における皮膚掻痒症の実態を調査するとともに、背景因子と接着因子との関連性について検討を加えた。

【対象および方法】血液透析患者(HD 群)：55 例について、かゆみの程度〔5段階のカテゴリー評価と visual analogue scale (VAS：視覚的尺度)による評価〕,頻度,部位,時期,睡眠障害の程度および治療内容についてのアンケート調査を実施した。さらに、各種臨床検査および血清中接着因子(sVCAM-1, sICAM-1)と皮膚掻痒症との関連性を解析した。

【結果】HD 群 55 例中 42 例(76.4%)に掻痒を認め、そのうち 64%が毎日掻痒感を訴えていた。部位は背中,胸,腹,足などに多く、約 43%に掻痒による睡眠障害を認めた。また、季節性は冬に多く、時間は夜・眠る前に多かった。透析治療との関連では透析前にくらべて透析中＜透析後に多かった。掻痒の治療に関しては約 79%の患者が日常的に受けており、治療方法は一般的な外用薬(49%),注射薬(39%)が多かった。接着因子との関連性については,かゆみの目盛(VAS)と sVCAM-1, sICAM-1,補正 Ca・P 積は正の相関を示した。

【結論】血液透析患者においては皮膚掻痒症が高頻度にみられ、かゆみの程度と接着因子が正の相関を認めた。このことから、透析皮膚掻痒症の発症および病態に接着因子が何らかの関連性を持つことが示唆された。